

eラーニングに対する態度への学習スタイルの影響 —大学英語教育を対象に—

カレイラ松崎 順子¹⁾

多くの大学がeラーニングを英語の授業に導入しはじめており、新しい学習形態としてのeラーニングに注目が集まっている。本研究では学習スタイルに注目し、学習者の学習スタイルがeラーニングに対する態度にどのような影響を与えているのかを検証するため、私立大学1年生の英語の授業において質問紙調査を実施した。学習スタイルの6つの下位尺度を独立変数として従属変数「eラーニングに対する肯定的態度」に対して重回帰分析を行った結果、「論理」、「聴覚型」、および「グループ」から「eラーニングに対する肯定的態度」はそれぞれ有意な正の標準偏回帰係数を示した。ゆえに、(1)論理的に物事を考える傾向がある学生はeラーニングに対して肯定的な態度を持つ傾向がある、(2)グループ活動を好む学生はeラーニングに対して肯定的な態度を持つ傾向がある、および(3)音声で学習することを好む学生はeラーニングに対して肯定的な態度を持つ傾向があるという可能性が示された。

キーワード

英語学習, eラーニング, 情意要因, 学習スタイル

1. はじめに

個人差に対応できる教育方法として最近eラーニングに注目が集まっている。eラーニングとは、“コンピュータやインターネット、モバイル端末等の情報技術〔IT (Information Technology)〕を用いて、学習者が主体的に学習できる環境による学習形態” (メディア教育開発センター, 2007, p. 29) のことである。2001年、日本政府は「e-Japan戦略」と具体的な行動計画である「e-Japan重点計画」を発表し、その中で教育現場におけるIT教育の充実ということを唱えた (首相官邸, n.d.)。そのため、近年日本の多くの大学でeラーニングを導入しはじめた。メディア教育開発センターによる「eラーニング等のICTを活用した教育に関する調査報告書 (2007年度)」 (日本イーラーニングコンソシアム編, 2009) によると、2007年度の高等教育機関におけるeラーニングの実施率は51.1%であり、大学46.1%、短期大学19.7%、高等専門学校68.8%であった。また、授業提供形態では「対面授業とeラーニングのブレンディ型の授業を行っている」が79.6%と最も多く、ついで「自習用教材として提供している」が72.0%、「eラーニングによる履修のみで修了できる講義、授業がある」が24.7%であった。日本の英語教育の現場においても、近年eラーニングを導入する学校が急増しており、それに伴いeラーニングに

関する研究も増加している (e.g., 天沼, 2007; 安藤, 2005, 2008; 青木・今村, 2001; カレイラ, 2009; 日野, 2006; 柏原, 2005; 新村, 2007)。

ところで、eラーニングを活用した教育は、様々な学習スタイルに適合した学習環境を構築できる可能性がある (青木, 2005) ため、どのような学習スタイルを持つ学生がeラーニングを使用した学習方法を好むのか、どのような学習スタイルを持つ学習者がeラーニングによる学習方法に抵抗を感じるのかなど、学習者の学習スタイルにもっと目を向けていくべきである。学習スタイルとは、新しい情報を取り入れ、理解するときに学習者が行う内的な特徴である (Reid, 1998)。学習スタイルの研究は過去30年の間、欧米を中心に教育・心理学・経営等の分野において様々な研究が行われてきた (青木, 2005)。英語教育においても学習スタイルの研究はいくつか行われてきたが (e.g., Reid, 1987; Yukimaru, 2004)、eラーニングに関する学習スタイルの研究は今までほとんど行われていない。よって、本研究では学習者の学習スタイルが英語のeラーニングに対する態度にどのような影響を与えているのかを調査することにした。

2. 先行研究

2.1 学習スタイル

画一化した教育を実施するという教育方式から、個々の人のニーズ・能力・嗜好・スタイルに合った学習環境を提供するという学習者中心の教育に移行しつつある (青

¹⁾ 東京未来大学

木, 2005)。学習者中心の教育に移行すればするほど、学習者の学習スタイルを把握し、個々の学習者に適切な学習方法を提供していくことが重要になってくる。

言語教育における学習スタイルの研究は藤田 (2002) およびYukimaru (2004) が日本人を対象にした学習スタイルの研究を行っている。藤田 (2002) はKolb (1984) の学習理論に基づいた外国語学習スタイル調査票を作成し、日本人大学生を対象に調査を行った。その結果、Kolbが想定した4つの学習能力を示す因子(分散型・同化型・集中型・調節型)は抽出されず、目標に向かって着実に進んでいく「熟考」、論理的であることを重視する「論理」、実際の場面で言葉を使いながら覚えていく「実用」、新しいことに柔軟に対応していく「挑戦」、多くの情報を体系的に整理して規則を学んでいく「秩序」の5因子が抽出された。藤田 (2002) によれば、この5因子はそれぞれ独立しており内の一貫性も認められるため、日本人大学生にはKolbの理論とは異なる外国語学習スタイルが存在する可能性が高いことを示唆している。Yukimaru (2004) は日本の大学生を対象にReid (1987) やEly (1995) を参照して、音声で学習することを好む「聴覚型」、文字で学習することを好む「視覚型」、グループで学習することを好む「グループ」、一人で学習することを好む「個人」、物事を分析的にとらえる「分析的」、物事を全体的にとらえる「全体的」、曖昧なものを容易に受け入れられない「曖昧さの非耐性」、および曖昧なものを気にせず受け入れることができる「曖昧さの耐性」の8つの学習スタイルと文化的ピリーフ(西洋的な文化的価値観・日本的な文化価値観)の関係を調べている。その結果、グループ学習を好む学生は日本的な文化的価値観を持つ傾向があり、一人で学習することを好む学生は西洋的な文化的価値観を持つ傾向があることを明らかにしている。

2.2 第二言語習得におけるコンピュータ利用学習に対する態度と情意要因の関係

Computer Assisted Language Learning (CALL), すなわちコンピュータを利用した外国語教育(白畑・富田・村野井・若林, 1999)の学習環境における態度と情意要因の関係の研究はいくつか行われている(e.g., Brett, 1996; Chapelle & Jamieson, 1986; 真野・大須賀, 2005; 大木・田地野・浅田・高橋, 2003; 大須賀・野沢・真野・山本, 2003; 劉, 2002; Stevens, 1991; Van Aacken, 1999)。

Chapelle & Jamieson (1986) はCALLに対する学習者の態度や利用時間と学習者の言語学習に対する動機づけの強さとの間に有意な関係があることを示した。Stevens (1991) とBrett (1996) は、CALL利用に対する態度を測定し、その結果CALL利用に対する学習者の態度は好意的で積極的であったことを報告している。その他、

Van Aacken (1999) は日本語学習者を対象に、日本語漢字学習CALLを用いて、学習ストラテジー、動機づけおよびコンピュータ利用に対する態度の関係を調べた。その結果、CALLに対する積極的な態度は漢字学習の成功に影響を与えること、特に、「仕事の手段として日本語を勉強する」というような道具的動機づけが高ければ高いほど、CALL学習が能動的に行われることを明らかにした。また、劉 (2002) は日本語教育において接触・操作に対する不安およびCALL利用拒否的態度尺度の得点が高ければ高いほど、ヘルプや情報の利用頻度の減少に結びつくことやコンピュータ利用への意欲尺度の得点が高ければ高いほど、CALLでの学習活動が活発に行われる傾向があることを明らかにした。

日本人を対象にした研究では、大須賀他 (2003)、大木他 (2003) および真野・大須賀 (2005) がCALLと情意要因の関係の研究を行っている。大須賀他 (2003) は、CALL授業が大学生の英語学習に対する動機づけや自主学習にどのような影響を与えるのかをCALL受講群と非受講群に分け比較した。その結果、英語学習に対する動機づけの「英語で情報を受信・発信+内発的動機」と「道具的動機」においてCALL受講群のほうが非受講群よりも因子得点の平均が有意に高かった。ゆえに、大須賀他 (2003) はCALL受講経験が大学生の英語学習に対する動機づけおよび自律的な学習態度に正の影響を与えているのだらうと述べている。大木他 (2003) はCALLの授業が学習者のフランス語学習の動機づけにどのように影響を与えるのかを検証した。その結果、CALLの授業のほうが教師主導型の授業に比べて、熱心に課題に取り組み、今後もより努力しようとする強い動機づけを生じさせる傾向があることを明らかにした。また、真野・大須賀 (2005) はCALLに対する態度と個人差を調査した結果、英語学習への動機づけはCALLに対する態度に正の影響を与え、コンピュータ不安、すなわちコンピュータと接触するときやコンピュータ利用の意味について考える時などに個人内に喚起される不安(Cambre & Cook, 1985)はCALLに対する態度に負の影響を与えていることを明らかにした。

2.3 英語教育におけるeラーニング

近年、英語教育におけるeラーニングに関する研究が増加している。たとえば、オープンソースソフトウェアのコース管理システムであるMoodleを取り入れた事例研究(e.g., 天沼, 2007; 安藤, 2008; Gorringer, 2007; 新村, 2007; Visgatis・正木・多田, 2007)などがあげられる。

その他、藤代・宮地 (2009) はWeb Based Training (WBT) を使用した高等学校の英語の授業において、音読力と自由発話力に及ぼす効果を検証した結果、音読力、口頭能力、およびリスニング力の向上が見られたことを

報告している。田中・名木田・小林・板谷・Waterbury (2007) は医学用語の英語の語彙学習にeラーニングを導入し、その効果を実証している。Liaw (2006) はeラーニングを使用することにより学生の異文化間コミュニケーション能力がどのように向上したのかを報告している。その他、國吉・神保・石田・木村・酒井・笹島・生内・河内山・染谷・Sawazaki・Lange・中原・小野 (2005) はリメディア教育のためのeラーニング教材の開発を、朱・小宮山・古井・速水 (2007) は小学生向けのデジタル絵本の開発を行っている。小林・名木田・板谷・田中・Waterbury (2008) は学習意欲とコンピュータに対する苦手意識との関係を調べ、コンピュータに対する苦手意識が高いと学習意欲が低下していることを明らかにしている。安藤 (2005) はALC NetAcademyを使用したeラーニングの授業の利点や問題点をあげている。その中で、英語に関する質問よりもパソコン操作に関する質問が多く、また教員の授業外での負担が多いことなどを指摘している。カレイラ (2009) はeラーニングによる自習形式の文法学習の効果を調べた結果、事前・事後に行われた文法テストの結果には有意な差は見られなかったが、半数以上の学生が自分たちの英語力が向上したと感じていることから、eラーニングによる自習形式の文法学習は有効な学習方法であろうと述べている。

3. 本研究

3.1 本研究の目的

CALLなどのコンピュータ利用学習に対する態度と情意要因の関係やeラーニングに関する研究は今まで行われてきたが、英語教育におけるeラーニングに関する学習スタイルの研究は、今まであまり行われていない。どのような学習スタイルを持つ学生がeラーニングを使用した学習方法を好み、どのような学習スタイルを持つ学習者がeラーニングによる学習方法に抵抗を感じているのだろうか。本研究ではこのような問いに答えるために、以下のリサーチ・クエスチョンをたてて調査を行った。リサーチ・クエスチョン (RQ)
学習スタイルがeラーニングに対する態度を予測できるだろうか。

3.2 手続き

2006年4月から7月にわたり、英語eラーニング1を受講した東京都内の私立のA大学の経済学部1年生88名(男子50名、女子38名)を対象に質問紙調査を5月中旬(3回目の授業)に実施した。なお、同時期に行ったTOEIC®の得点は300~500点台であった。

英語eラーニング1ではALC NetAcademyの初級・中級コースを使用した。初級・中級コースはリスニング力強化コース・リーディング力強化コース・TOEIC®テスト演習コース・TOEIC®テストパート演習コース・

中間テストおよび修了テストで構成されている(アルク, n.d.)。授業はブレンディド型を採用しており、週に2回のうち、1回はeラーニング教材を使用した対面授業を教員が行った。最初に教員がALC NetAcademyの初級・中級コースの語彙の説明を行い、その後学生はパソコン上でリスニングとリーディングの問題を解き、ペアやグループで会話練習や課題などを行った。もう1回は学生が指定された時間にコンピュータ室に集まり、教員より出された課題を各自が行った。

3.3 材料

本研究は授業中に調査を行ったため、調査のために多くの時間を費やすことができなかった。ゆえに、短時間で多くの情報を集めることができる(Dörnyei, 2003)質問紙調査を行うことにした。

質問紙はeラーニングに対する態度の尺度および学習スタイルに関する尺度によって構成されている。件数を奇数(5件法など)にすると、あまり考えずに真ん中のカテゴリー「どちらでもない」「中ぐらい」を選ぶ回答者がいると思われるため(Dörnyei, 2003)、本研究では4件法(全然あてはまらない・あまりあてはまらない・まあまああてはまる・よくあてはまる)を採用した。

eラーニングに対する態度

eラーニングに対する態度を調べるために、劉(2002)をもとに、下位尺度「eラーニングに対する肯定的態度」の合計4項目の尺度を作成した(付録1を参照)。

学習スタイル

Reid (1987) が提案する「聴覚型」・「視覚型」・「グループ」・「個人」およびEly (1995) が提案する「曖昧さの耐性」の5つの下位尺度をYukimaru (2004) の日本語訳を参考に作成した。さらに、Kolb (1984) の概念をもとにした藤田(2002)の「論理」の下位尺度を採用した。すなわち6つの下位尺度(各下位尺度5項目)30項目を使用した(付録2を参照)。

3.4 分析方法

本研究ではeラーニングに対する態度および学習スタイルの各下位尺度の平均値、標準偏差、およびCronbachの α 係数を求め、学習スタイルの各下位尺度の相関関係を求めた。さらに、学習スタイルがeラーニングに対する態度を予測できるのかを検討するため、学習スタイルの6つの下位尺度を独立変数として、eラーニングに対する態度を従属変数として重回帰分析を行った。なお、これらの尺度は順序尺度であるが、比率尺度と見なして以下の分析を行った。

4. 結果

「eラーニングに対する肯定的態度」の4項目（4件法）の得点を合計し、「eラーニングに対する肯定的態度」の得点とした。平均値と標準偏差はそれぞれ10.45, 2.33であった。Cronbachの α 係数は.84であり信頼性が確認された。

学習スタイルの6つの下位尺度, すなわち各下位尺度5項目（4件法）の得点を合計して各下位尺度の得点とした。学習スタイルの各下位尺度の平均値, 標準偏差, およびCronbachの α 係数をTABLE 1に示す。各下位尺度のCronbachの α 係数は.60から.87であり, 概ね満足できる値をとっており, 内的一貫性が確認されたといえる。また, 学習スタイルの各下位尺度の相互相関をTABLE 2に示す。「論理」と「視覚型」, 「論理」と「曖昧さの非耐性」, 「論理」と「聴覚型」, および「個人」と「視覚型」の間に正の有意な相関が見られた。その他, 「個人」と「聴覚型」および「個人」と「グループ」の間に負の有意な相関が見られた。

学習スタイルがeラーニングに対する態度を予測できるのかを検討するため, 重回帰分析を行った。すなわち, 学習スタイルの6つの下位尺度を独立変数として従属変数「eラーニングに対する肯定的態度」について重回帰分析を行った。その結果をTABLE 3に示す。なお, Variance Inflation Factor (VIF) は最大2.083で多重共線性の可能性は排除された。

分析の結果, 説明率が有意であり ($R^2 = .30, p < .01$), 「論理」 ($\beta = .40, p < .05$), 「聴覚型」 ($\beta = .27, p < .05$), および「グループ」 ($\beta = .32, p < .05$) から「eラーニングに対する肯定的態度」はそれぞれ有意な正の標準偏回帰係数を示した。

TABLE 1 学習スタイルの各下位尺度の平均と標準偏差

下位尺度	平均値	標準偏差	α 係数
視覚型	14.00	2.84	.62
曖昧さの非耐性	13.39	2.41	.73
聴覚型	13.39	2.41	.60
論理	12.84	2.37	.60
グループ	11.93	3.29	.87
個人	13.85	3.09	.84

TABLE 2 学習スタイルの各下位尺度の相互相関

	視覚型	非耐性	聴覚型	論理	グループ	個人
視覚型						
非耐性	-.03					
聴覚型		-.21		.38*	-.12	.41*
論理			.18	.38*	-.04	.14
グループ				.24*	.21	-.31*
個人					-.06	.22
						-.56*

* $p < .05$.

TABLE 3 学習スタイルの「eラーニングに対する肯定的態度」に対する重回帰分析結果

	B	SEB	β	p
視覚型	-.23	.13	-.24	.08
曖昧さの非耐性	-.17	.10	-.21	.09
聴覚型	.28	.13	.27	.04
論理	.39	.14	.40	.01
グループ	.23	.10	.32	.03
個人	.18	.11	.24	.13

(注) $R^2 = .30$ B = 回帰係数, SEB = 標準誤差, β = 標準偏回帰係数

5. 考察

重回帰分析を行った結果, 「論理」が「eラーニングに対する肯定的態度」に正の影響を与えていることが明らかになった。ゆえに, 物事を論理的に捉えることができる学生は, eラーニングという学習方法を肯定的に受け入れる傾向があるが, 論理的に物事を捉えるのがあまり得意でない学生はeラーニングの学習方法を受け入れられない可能性があるといえるであろう。

さらに, 聴覚型の学生がeラーニングに肯定的な態度を持つことも明らかになった。教師主導のリスニングの授業では, 授業中に何度も同じ部分を自分のペースで繰り返し聞くことができないため, 聴覚型の学生は一斉授業の形態でのリスニングの授業に十分満足していないと考えられる。ゆえに, 聴覚型の学生が何度も好きなだけ繰り返し聞けるeラーニングの授業に好意的な態度を持ったのではないかと推測できる。以上のことから, 英語教育においてeラーニングを導入する際には英語を聞くことができる部分を多く取り入れることを示唆できるであろう。

ところで, グループ活動を好む学生がeラーニングに肯定的な態度を持つ傾向があることも明らかになったが, 本研究に参加した学生は, 本調査を行う前に3回の授業を受けており, その中でeラーニング教材を使いながらペアやグループでの会話練習や課題などを行った。そのような授業形態や内容が今回の結果に影響を与えたのではないかと考えられる。

6. 今後の課題

本研究の限界点として以下の3点があげられる。

第一に, 重回帰分析の結果において決定係数が低いために, 学習スタイルの説明力が大きいとはいえない。おそらく, 学習スタイル以外の要因, たとえば動機づけ, コンピュータ不安, 英語力, およびタイピング力なども

eラーニングに対する態度に影響を与えていると予想できる。ゆえに、eラーニングに対する態度に影響を与えている要因を明らかにするためには、今後はこれらの要因を含めた研究を行う必要があるであろう。

第二に、本研究は東京にある私立大学1校よりデータを集めたものであり、調査協力者が88名と少ない。また、今回はALC NetAcademyというある特定のeラーニングシステムを使っている学生を対象に調査を行った。今後はより多くの学生を調査対象とし、その他のeラーニングシステムを使った授業の調査を行い、より結果を一般化していく必要があるであろう。

第三に、本調査を行う前に学生はALC NetAcademyを使った授業を3回受けているため、授業での教授形態や授業内容などが本研究の結果に影響を与えていると考えられる。また、本研究からはeラーニングのどの特性に好意的なのかは不明である。ゆえに、今後は授業内容や教授法などeラーニングに対する態度以外の要因を極力排除し、eラーニングのどの特性に好意的なのかを明確に測れるような質問紙を作成するべきであろう。

7. 最後に

本研究はeラーニングに対する態度と学習スタイルの関係を調査し、今回調査した対象者において以下3点の可能性が示された。

- (1) 論理的に物事を考える傾向がある学生はeラーニングに対して肯定的な態度を持つ傾向がある。
- (2) グループ活動を好む学生はeラーニングに対して肯定的な態度を持つ傾向がある。
- (3) 聴覚型の学生はeラーニングに対して肯定的な態度を持つ傾向がある。

これらのことは英語教育におけるeラーニングの研究に有益な示唆を与えるものである。今回はeラーニングを学習して間もないときにどのような印象を持つのかを調査した。今後は、一年間学習した結果どのような学習スタイルの学生がeラーニングに対して肯定的な態度を持つのかなど、情意要因とeラーニングの関係を様々な角度より調査する必要があるであろう。

引用文献

- アルク (n.d.). ALC NetAcademy <<http://www.alc-education.co.jp/academic/net/course.html>> (2010年3月26日)
- 天沼実 (2007). 外国語授業におけるeラーニング (Moodle) 利用の試み, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 30, 11-16.
- 安藤直 (2005). eラーニングの利点と問題点: ALC Net Academyを用いた音声教育の事例, 名古屋学芸大学研究紀要, 教養・学際編, 1, 1-10.

- 安藤直 (2008). Moodle活用による基礎英語学力向上サポート講座の展開と行方, 名古屋学芸大学研究紀要, 教養・学際編, 4, 117-126.
- 青木久美子 (2005). 学習スタイルの概念と理論—欧米の研究から学ぶ—, メディア教育研究, 2, 197-212.
- 青木由香里, 今村洋美 (2001). 英語教育におけるEラーニングと今後の課題, 中部大学国際関係学部紀要, 26, 137-147.
- Brett, P. (1996). Using multimedia: an investigation of learners' attitudes, *Computer Assisted Language Learning Journal*, 9, 191-212.
- Cambre, M., & Cook, D. (1985). Computer anxiety: definition, measurement, and correlates, *Journal of Educational Computing Research*, 1, 37-54.
- カレイラ松崎順子 (2009). eラーニングによる自習形式の文法学習, 全国調査から見るICT教育—実践・評価・理論2008年度ICT活動報告書, 183-187.
- Chapelle, C., & Jamieson, J. (1986). Computer-assisted language learning as a predictor of success in acquiring English as a second language, *TESOL Quarterly*, 20, 27-46.
- Dörnyei, Z. (2003). Questionnaires in second language research: Construction, administration and processing. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ely, C. M. (1995). Tolerance of ambiguity and the teaching of ESL. In J. M. Reid (Ed.), *Learning styles in the ESL/EFL classroom* (pp. 87-95). Boston, MA: Heinle & Heinle Publishers.
- 藤代昇丈, 宮地功 (2009). ブレンド型授業による英語の音読力と自由発話力に及ぼす効果, 日本教育工学会論文誌, 32, 395-404.
- 藤田裕子 (2002). 日本人大学生の外国語学習スタイルとKolbのExperiential Learning Theory, *JALT Journal*, 24, 167-181.
- Gorringer, A. (2007). Using moodle in a reading class 活水論文集, 英語学科編, 50, 35-41.
- 日野克美 (2006). 宮城大学事業構想学部における英語教育の検証: E-Learning導入の経緯と結果, 宮城大学事業構想学部紀要, 9, 31-38.
- 柏原郁子 (2005). e-Learning教材における効果的指導法ALC Net Academyを用いた実践授業と学生による授業アンケート評価, 外国語教育フォーラム, 4, 79-92.
- 小林伸行, 名木田恵理子, 板谷道信, 田中信代, David H. Waterbury (2008). 医学用語ブレンディッド・ラーニングシステムにおける学生の成績と意識の分析, 川崎医療福祉学会誌, 17, 423-430.
- Kolb, D.A. (1984). *Experiential Learning*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- 國吉丈夫, 神保尚武, 石田雅近, 木村松雄, 酒井志延, 笹島茂, 生内裕子, 河内山晶子, 染谷泰正, Renée A. Sawazaki, Elizabeth J. Lange, 中原淳, 小野博 (2005). 大学生のための英語リメディア教育e-Learning教材“University Voice”の開発, メディ

- ア教育研究, 2, 121-135.
- Liaw, M. (2006). E-learning and the development of intercultural competence, *Language, Learning & Technology, 10*, 49-64.
- 真野千佳子, 大須賀直子 (2005). 大学生のCALLに対する態度・授業評価に影響を及ぼす個人差要因, 文教大学国際学部紀要, 16, 115-133.
- メディア教育開発センター (2007). eラーニング等のITを活用した教育に関する調査報告書 (2006年度)
- 日本イーラーニングコンソシアム編 (2009). eラーニング白書2008/2009年度, 東京電気大学出版局
- 大木充, 田地野彰, 浅田健太郎, 高橋克欣 (2003). 自律学習と学習者の動機づけに対するCALLの有効性—自律学習支援環境の構築に向けて—, フランス語教育, 32, 87-100.
- 大須賀直子, 野沢智子, 真野千佳子, 山本厚子 (2003). 『統合的な』CALL授業が大学生の英語学習動機, 自主学習, コンピュータ利用に及ぼす効果—CALL授業受講者と非受講者の比較から—, 日本教育工学雑誌, 27, 427-436.
- Reid, J. M. (1987). The learning style preferences of ESL students, *TESOL Quarterly, 21*, 87-111.
- Reid, J.M. (1998). *Understanding learning styles in the second language classroom*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall Regents.
- 劉百齡 (2002). CALL利用学習に対する態度・動機づけ要因の分析, 言葉と文化, 3, 201-214.
- 新村知子 (2007). Moodleを使った英語学習支援の試み 石川県立大学年報: 生産・環境・食品: バイオテクノロジーを基礎として, 18, 57-74.
- 白畑知彦, 富田裕一, 村野井仁, 若林茂則 (1999). 英語教育用語辞典, 大修館書店
- Stevens, V. (1991). Study of student attitudes toward CALL in a self-access student resource centre, *System, 19*, 289-299.
- 朱文昌, 小宮山美緒, 古井陽之助, 速水治夫 (2007). 小学生向けデジタル絵本教材システムを用いた学習効果の検証, 情報処理学会研究報告, 32, 103-108.
- 首相官邸 (n.d.). 高度情報通信ネットワーク社会推進略本部 (IT戦略本部) <<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/index.html>> (2007年11月23日)
- 田中伸代, 名木田恵理子, 小林伸行, 板谷道信, David H. Waterbury (2007). 医学用語教育におけるe-learning: ブレンディッド・ラーニングの実践と評価, 川崎医療福祉学会誌, 17, 153-162.
- Yukimaru, N. (2004). Learning styles, cultural beliefs, and classroom activities preferences: A study in the Japanese EFL context, *Language Education & Technology, 41*, 103-122.
- Van Aacken, S (1999). What motivates L2 learners in acquisition of kanji using CALL: A case study, *Computer Assisted Language Learning, 12*, 113-136.
- Visgatis Brad, 正木美知子, 多田昌夫 (2007). 守口キヤンパスにおけるMoodleを使った英語多読プログラム, 国際研究論叢, 21, 141-149.

付録1 eラーニングに対する肯定的態度の質問項目一覧

1. eラーニングは面白そうだ。
2. eラーニングは楽しそうだ。
3. eラーニングで英語の力がつきそうだ。
4. コンピュータを使って外国語を勉強することにとっても興味がある。

付録2 学習スタイルの質問項目一覧

視覚型の下位尺度

1. 説明を読むほうが聞くよりも, その内容をよく理解できる。
9. 説明を受けるときに, 聞くよりも読むほうが覚えやすい。
14. 先生が黒板に書いたことを読むとよく理解できる。
21. 話を聞くよりも読んだほうがよく理解できる。
23. 授業で聞いたことよりもテキストで読んだことのほうがよく覚えている。

曖昧さの非耐性の下位尺度

2. 英語の発音が間違っていると思うと, 恥ずかしくて発言したくない事がある。
5. 英語の文法は完璧に理解していないと不安だ。
13. 英語の文章を読むときには, 全ての文の意味が分からないと不安だ。
19. 授業中に分からない英単語が出てくると, とても気になる方だ。
24. 授業で聞くことは, 全て分からないと不安に思う。

聴覚型の下位尺度

3. 英語の授業中, 先生の話の話を聞くとよく覚えられる。
16. 授業中に誰か (例えば, 隣の人) がやり方を教えてくれるとよく学べる。
17. 先生が説明してくれるとよく理解できる。
29. 授業では話を聞くほうが, 本などを読むよりもよく学べる。
30. 授業中, 先生が講義をしてくれるとよく理解できる。

論理の下位尺度

6. 1つ1つ確実に理解していく。
8. 論理的に正しいことを一番大切にする。
10. 直感に頼るよりも細かく分析して考える。
27. 論理的に納得できるまで考える。
28. 一つの正しい答えを求める。

グループの下位尺度

11. クラスの人たちと一緒に勉強すると学習がはかどる。
18. 一人で学習するより他の人と学習するほうがいい。
22. 数人のクラスメートと一緒に宿題をやると楽しんで行える。
25. グループで学習するとよく学べる。
26. 授業中他の人と一緒に学習するほうがよく学べる。



カレイラ松崎 順子
津田塾大学大学院文学研究科コミュニケーション研究言語教育後期博士課程を修了し、現在、東京未来大学専任講師である。外国語学習における動機づけなどの学習者要因を中心に研究を行っている。

個人の下位尺度

4. 一人で作業を行うことが好きだ。
7. 自分一人で勉強をするとよく覚えられる。
12. 自分一人で勉強したほうが学習がはかどる。
15. 英語の授業中、ペアやグループで何かを行うよりも一人で学習するほうが好きだ。
20. 英語の授業中、一人でいろいろな作業を行ったほうがいい。

Effect of Learning Style on Attitudes towards English e-Learning

Junko Matsuzaki Carreira¹⁾

In Japan, many universities have recently started to introduce e-Learning in English lessons. The purpose of this study is to identify a combination of students' attitudes towards English e-Learning and learning style. The participants in this study were 88 first year students majoring in economics at a private university in Japan.

The results of regression model suggests (a) logical students tend to have positive attitudes towards English e-Learning, (b) students who like group activities are likely to have positive attitudes towards English e-Learning, and (c) students who have auditory learning style preference are likely to have positive attitudes towards English e-Learning.

Keywords

English education, e-Learning, affective factors, learning style

¹⁾ Tokyo Future University